

バルト 3 国の旅 2018



2018 年 10 月

旅のチカラ研究所 植木圭二

秋も深まるバルト 3 国とポーランドにパッケージ旅行を使って妻と行ってきた。紅葉真っ盛りのこの時期に、この地方の歴史文化に触れる旅は思った以上に感動を得ることができた。初めて体験するアクシデントもあったが、それがまた面白い旅になった。

第一章 リトアニア

■ 下調べのない旅の始まり

今回の旅に出る前日、私は珍しく海外旅行保険の加入を手続きに慌てている。それも泥縄式の対応である。

この発端はその直前までオセアニアクルーズで知り合った友人と国内温泉旅行をしていて、バルト 3 国の入国には海外旅行保険の加入が必須という話を聞いた。私はクレジットカードに付帯している海外旅行保険を使っているのだから、その時はカードを見せれば大丈夫だろうなどとたかをくくっていた。

旅行会社に問い合わせた結果、確かにクレジットカード付帯のものでも問題ないというのだが、加入証明書それも英文のものが必要だという。

クレジットカード会社に問い合わせると証明書発行には 1 週間必要という。どんなにお願いしても 3 日間までにしか縮まらない。出発は明日というのにこれは困った。

駐日リトアニア大使館にも電話したが、リトアニア語の対応で何を言っているのか全く解せない。もっとも私がリトアニア語を解せたとしても答えは分かり切っている。そう、規定通り海外旅行保険に入って下さいと言われるだけだ。

私は何を期待して電話をしたのだろうか。「これはお願い事項であって有名無実ですよ」とかを期待したのだろうか。全くもって自分の馬鹿さ加減にあきれる。

クレジットカード付帯の保険を諦めて市中のいくつかの保険会社に電話するもいい返事はもらえない。本日中に証明書を入手することはもはや風前の灯になってきた。このままだと出国はできるが入国拒否されてしまうのかなどと悲観的になり始める。

そんな時に以前使ったことがある海外旅行保険の大手 AIU 保険を思い出した。今は AIG 保険という名称になっているが、106 日の地球一周クルーズの時に利用した。クレジットカード付帯の保険は 90 日間が限度ということで保険のカバー日数が不足しているのでいろいろ比較検討した結果選んだ保険会社だ。

早速電話をすると対応してくれた女性は柔らかい口調で、相談するので少々お待ちくださいということで待つこと 2、3 分、午前中に契約手続きをして頂ければ、本日中に発行できるという。彼女の声が天使のささやきのごとく聞こえる。

お客が本当に困っている時に何とかしてくれるのが信頼される会社だと改めて実感する。

何とか証明書をインターネット経由で入手し、一夜明けて私たち夫婦は成田空港の出発カウンターで手続きをしている。

今回は添乗員同行のパッケージ旅行なので、添乗員に証明書のことを聞くと返ってきた答えは「一応はそのように言われていますが、今まで証明書提示を求められたことは一度もありませんよ」という。安心したような気が抜けたような気分になる。

ドタバタながらなんとか乗り切るという今回の旅を暗示しているかのスタートだ。

■旧ソビエト連邦の国

ポーランド経由でリトアニアの首都ビリニュスに着いたのは成田空港を出発して 14 時間後。運よく？海外旅行保険の加入証明書の提示要請はなかった。

ホテルに着いたのは夜 8 時を回っている。

ホテルは至ってシンプルで小奇麗ながら部屋には何も無い。日本のホテルでは当たり前にあるエアコン、冷蔵庫、金庫、ロッカーなどは無く、あるのはヒーターだけだ。タオルはあるものの歯ブラシ、スリッパは無い。

そう、ここは旧ソビエト連邦の国である。バルト 3 国は 1991 年までソビエト連邦に属していたので、その影響が今も残っているのだろう。私はロシア以外の旧ソビエト連邦の国を訪問するのは初体験になる。

初体験ついでにもう一つ。近くにスーパーマーケットがあると聞き、荷物を置いて早速行ってみる。500ml の缶ビールが 0.6 ユーロだから約 80 円で売っている。その他の雑貨や菓子と合わせてレジで購入しようとするするとビールだけがはねられた。レジの女性が時計を指差してこの時間は酒類の販売はしないというようなことを言っているらしい。後で聞いた話では夜 8 時を過ぎると酒類の販売をしないという法律があるという。

酒飲みにはやや厳しい法律だが、夜中に「酒が足りない、買ってこい！」などと言うことがないのは健全なのかもしれない。

それにしてもリトアニアの初めての夜は、静かで空気が澄んでいて星が綺麗に見える。

■ビリニュス市内

翌朝、目を覚まし部屋の窓から外を見ると紅葉真っ盛りになっている。いや紅葉というよりは黄葉で、赤い色は少ない。

ホテルを出てバスに乗り観光に出かける。今回のツアー客は 29 人ということなので、バスは比較的ゆったりと乗ることができ、このバスでリトアニアからラトビア、エストニアまでの陸路を国境越えて行くことになる。

街の中心部にはネリス川が流れており、その川べりに杉原千畝（ちうね）の碑がある。その杉原千畝こそがこの国で一番有名な日本人だろう。

聖アンナ教会という 15 世紀に建てられたゴシック様式の教会を見る。ロシア遠征のナポレオンがこの地に來た時に、この教会を見てフランスに持ち帰りたいといったほどに美しいという逸話が残っている。



街は落ちついているように感じる。その落ち着きの原因はというと街歩きをする人の数やそのしぐさかもしれないが、街の中の看板が極めて少ないことだろう。華やかな看板やネオンなどはもちろんない。そんな素朴な光景が落ち着きを感じさせてくれる。

そう言えば、確かノルウェーには看板を規制する法律があったことを思い出す。

聖ペテロパウロ教会に立ち寄る。内装だけで 30 年かかったという教会の内部はとても豪華で手のこんだものになっている。この教会の真ん中にはノアの箱舟をモチーフした籠のようなインテリアが下がっている。珍しい光景だ。



カテドゥロス広場には大聖堂と鐘楼があり街の中心だ。散歩すると綺麗な紅葉にあうことができる。こんな光景はヨーロッパの至る所で遭遇するが、旧ソビエト連邦のイメージではない、やはりここはヨーロッパだと改めて感じる。

1940年第二次世界大戦中、ソビエト連邦は北東ヨーロッパの小さなこの3つの国を強引に併合した。それも独立国ではなくソビエト連邦の内部に取り込んだのだ。

■湖に浮かぶ城

ビリニュスから約30kmのところにはトラカイという街がある。ビリニュスの前の首都だったという場所で多くの湖があり、湖の中に飛び出た半島のような部分の先の小さな島の上に古城が立っている。

その湖と古城との組み合わせが非常に美しい。湖の青と空の青、古城のレンガ色の対比が素晴らしい。それに加えて紅葉の黄色がもの見事にはまっているからさらに素晴らしい。私も色々な古城を見てきたが、この光景は生涯でも忘れられないものであろう。



あまり観光客が少ないのも良い感じで景色を堪能することができる。今まで見てきた限りではリトアニアはまだ観光地としてあまり確立されていない部分が多い。だからこんなに素晴らしい場所でも観光客は多くない。そのために手付かずのヨーロッパを感じることができる。

最近はどこかの観光地に行っても中国人がたくさんいるが、ここでは見ない。理由は良く分からないが、ここが旧ソビエト連邦ということが影響しているのかもしれない。中国パワーも旧ソビエト連邦や現ロシアまでは届かないのだろう。

■旅はふれあい

初の晩餐会となる夕食はツアー参加者がホテルのレストランで一堂に会して、各テーブルでそれぞれ盛り上がっている。バルト3国に行こうという人はかなりのヨーロッパ通でみな旅好きなので、打ち解けるのも早い。

旅の本質は出会いであり、触れ合いだと私は思う。そしてその触れ合う相手とは一体誰なのだろうか。それは以下の3つだと思う。自然、人間、そして過去の人間だろう。

ちょっと説明を加えると、まず自然は分かり易い。海、山などの景色、そして動物、植物などの人工物以外のものになる。

次に人間だ。旅の中で触れ合う人のことで、知り合った人、同行した人、宿の人、料理してくれた人などのことだ。

では過去の人間との触れ合いとは何だろう。それは過去の人間が作った建造物、芸術、文化、食文化、歴史そのものなどだろう。遺跡だったらそれを造った人や当時そこに暮らしていた人と触れ合い、向き合うことになる。

ついでにグルメや酒はというと 3つの融合体になる。自然の恵みを過去の人間が食文化で育み、酒や料理を完成させた。そして現在の人間が料理し一緒に飲み食いする。

バルト 3 国は 3つの触れ合いに出会うことを予感させてくれる。

■杉原千畝の街

カウナスというリトアニア第 2の都市がある。大聖堂と旧市街の街であるが、強烈な印象は無い。この街は第一次世界大戦と第二次世界大戦の間の 22 年間はポーランドに占領されていた首都ビリニュスに代わって代理首都であった。

一時的にしても首都になるということは各国の出先機関である大使館や領事館が置かれることになり、日本の領事館もここに置かれていた。そしてそこには領事代理の杉原千畝がいた。領事代理といっても実質的には彼が責任者である。

ここでポーランドからリトアニアに流れてきたユダヤ人に対してビザを発給するという行為をしたのが杉原だ。当時ユダヤ人はナチスドイツの迫害から逃れるためにシベリア鉄道から日本を経由して太平洋を渡ってアメリカ大陸を目指すことが数少ない救いの道になっていた。そのためには日本政府の発行する通過ビザがないとこのルートでの脱出ができない。

このビザを取得しないとナチスドイツに捕らわれることになるので多数のユダヤ人がこの領事館にビザの発給を求めて毎日のように押し寄せてきたが、日本政府の立場では同盟国ドイツとの関係を考慮してビザの発給をしないように命令が出されていた。

人道的には発給すべしであるが、本国の命令に背くことになるので杉原は悩んだ。そして命令を無視して発給することを決断して半月間ではあるが、昼夜を問わず 1600 枚のビザを書き続けて多くのユダヤ人の命を救ったという事実が残っている。

当時ユダヤ人には国がなかった。イスラエルが建国されるのは第二次世界大戦終結後の 1948 年だ。

戦争が終わって助けられたユダヤ人たちが杉原を探したが、命令違反を行ったために日本政府の公式名簿から名前が抹消されており、やっと探し出したという。

そのかつての日本領事館の建物は現在も残っており、杉原記念館として人々に開放されているので見学コースにもなっている。住宅街の中にある普通の 2 階建て民家のような建物である。

私もその執務室で記念撮影をする。



彼のこの勇気ある行動を描いた日本映画「杉原千敏」が 2015 年に公開されているので、是非見に行きたいと妻と話をしながら杉原記念館を後にする。

■ ジャガイモ団子

昼食にはツェペリナイというジャガイモの郷土料理をいただく。ジャガイモ団子とでもいうもので、ジャガイモをすり込んだ生地で、ひき肉などの具を包んだもので、添乗員おすすめのものだ。確かに日本人に好まれそうな味で、見た目も面白い形をしている。



そしてこれはビールにとっても合う。リトアニアのビールの値段は昨夜のスーパーマーケットで分かっていたが、レストランで飲んでもやはり安い。500ml で 3 ユーロ、約 400 円というところだが、味は非常に美味しい。

リトアニアではぶどうが獲れないのでワインは作っていないが、ビールは作っているという。今回はビールの旅になりそうだ。

■ B 級観光地

リトアニア観光の最後に「十字架の丘」に立ち寄る。ここは添乗員の説明では B 級観光地だという。

シャウレイという土地にある小高い丘には元々土着信仰で十字架が立てられていたが、19 世紀に不治の病におかされた住民が治ったら十字架を立てると公言して、奇跡的に病が治って十字架を立てられてから評判が広まったという。以後、十字架の数がどんどん増えて民族・宗教の象徴として扱われるようになった。

特にリトアニアがソビエト連邦に併合された 1940 年から 1991 年までの間は特別な意味を持っていたという。人々は自分たち民族の精神的な拠り所としてこの地に十字架を立てて祈ったので抵抗運動の象徴になった、ソビエト連邦は軍隊を使ってブルドーザーで 3 度撤去を試みたが住民がすぐに十字架を立てるので最終的には諦めざるをえなかったという。

現在の十字架の本数はとても多く、恐らく何十万本の十字架が立てられており毎日のように増え続けている。売店が数店あって、どの売店でも様々なサイズの十字架を売っている。訪れる人

私たちはこれらの売店で十字架を買って願い事を書いて丘に立てる。日本でいうところの絵馬のような存在になっている。



私も妻と 2 人で 1 ユーロの十字架を買い、家内安全、商売繁盛、健康長寿、子宝などたくさんの願い事を書いた。立てに行こうとすると、他のツアー客から 1 ユーロでは頼み過ぎだろうと言われる。確かに。

第二章 ラトビア

■リーガの街

ラトビアの首都リーガは古い港町でハンザ同盟に属して発展した。13 世紀頃からのなので日本では鎌倉時代にあたる。ハンザ同盟とは教科書で名前くらいは聞いたことがあるかも知れないが、中性ヨーロッパでバルト海や北海沿岸の貿易都市同盟である。この盟主はドイツのリューベックで、その他多くの有名な港町がこの同盟に加盟して発展している。その意味でもドイツの影響力が強いということが理解できる。

私もリューベックに行ったことがあるが、運河に囲まれた中世ヨーロッパの面影が濃厚に残っているという点ではリーガもリューベックも似ている。しかしリューベックは既に昔の都と化しているのに、リーガはラトビアの首都で人口 70 万人の大都市だ。単なる過去の人間の遺産ではなく、現在の人間が生活を営み発展し続けている。

ラトビア全体で 200 万人しかいないのにその 1/3 が集まっている一極集中の大都市になっている。人口としてはバルト 3 国最大の都市だ。

ちなみに昨日までいたリトアニアの人口は 280 万人、首都のビリニユスは 53 万人。これから行くエストニアは 135 万人で、その首都タリンは 42 万人だ。

旧市街地は石畳で出来ている。この街にも大聖堂があり 1211 年にできたというので相当に古い。その大聖堂のステンドグラス 4 枚に街の歴史が描かれている。実に興味深い歴史伝承の方法と思う。

3 兄弟（スリーブラザーズ）と呼ばれている 3 軒の家が並んで建っている。別に兄弟が建てた家ではないが 3 軒が並んで建っているので外見上そのように呼ばれている。右側にあるのが長兄と呼ばれる一番古い家は 15 世紀、真ん中の次兄には 1646 と書かれている。窓の大きさに着目すると長兄の時代は窓の面積によって税金が多くなるという税制のために小さな窓だったと、しかしその後その税制が変わって窓を大きくとることができるようになったという。

日本では室町時代から江戸時代初期の頃になる。レンガ造り 4 階建ての民家が作られていたこと、そしてそんな税金があったのだから日本とはえらい違いだ。



現地ガイドの案内により効率的に市内の名所をほとんど回ることができたが、場所が分からずに地図を見るとか地元の人に道を聞くとかということもない。観光案内のビデオでも見ているようで自分の旅になっていないような気もしてくる。

人間というのは実にわがままで厄介なものだ。トラブルがあれば文句を言い、なければ物足りないなどと言う。

■カフェで一杯

本日は昼食も含めて夜までは自由時間という予定なので、少し休憩したくドーマ広場のカフェレストランのオープンテーブル席に座る。同席したのは同じツアー客で先ほど買い物の時に一緒に値切り交渉をした平野さん夫妻だ。

この広場のこの席からはリーガ大聖堂が目の前に見えて真っ青な空に大聖堂と太陽があるだけという絶好のコンディションに陣取ることができた。心地よい日差しの中のまったり感の中、昼間から美味しい生ビールを飲むというこの上ない幸せに酔いしれている。



平野さんと色々話をする。文化遺産が好きでヨーロッパに頻繁に旅行に来ているという。遺跡ではなくそこに今でも人々の暮らしのあるところが好きだということで、過去の人間と現在の人間との融合物との触れ合いを楽しんでいるということになる。そういう目的ならばこのバルト3国はもってこいの場所だろう。

フランスやイタリアのように華やかな観光地でもなく、派手な看板やネオンもなく中世ヨーロッパを残しながらヨーロッパの地方都市の生活と触れ合うことができる。そして何よりも中国人もいない。時々目にするアジア圏の人はみな日本人である。

■教会の塔にのぼる

聖ペテロ教会の塔は123mで、72mまでエレベーターで登ることができる。13世紀からある教会だがエレベーター部分は第二次大戦後にできたのだろう。この塔に登ると街を360度見渡すことができる。

川と運河に挟まれた旧市街地の中を石畳の道が縦横無尽に曲がりながら延びている。その間に中世ヨーロッパの教会や家があり、ところどころには紅葉した木々が彩を添える。まるであつらえた箱庭の街を見ているようだ。

そしてその箱庭の色はというと川が最も濃く青い、空は薄い青で、建物の屋根は濃いオレンジ色、紅葉の木々は主に黄色と緑、石畳の道は灰色という配色になっている。

そんな街や空を眺めていると面白いことに気が付く。いや、日本では見たこともないことに気が付いた。それは360度見渡す限り山がないことなのだ。従って360度地平線が広がっているという日本では見ることができない景色に感激する。

バルト3国をバスで移動しているとほとんど平坦な土地で、多少の緩やかな凹凸はあるものの山と認められるものは一切ない。日本のように国土の70%が山地の国では考えられないほどに平坦な国土で、バルト3国で最も高い山はエストニアにある標高320mの山だそうだ。

この過去の人間が作った街と大自然の融合作品を見ることができただけでも、遙かバルト3国まで来た甲斐があったと感激する。



■市場で昼食

少し遅い昼食をとるためにちょっと風変わりなカマボコ型の屋根をした建物が4つ並んで建っている中央市場にやって来た。とても巨大な市場でユニークな形、驚くほど内部は天井が高い。ドイツのツェッペリン型飛行船の格納庫を移築して作ったというから納得できる。(上の写真の中央部分の4つの建物)

それにしてもその時代から既に100年近く経っているのにこの綺麗さは信じられない。内部は掃除がいき届いておりとても綺麗だ。一般的に市場というと床にはゴミが落ちていて、水や水産物の汁などでシミがあるのは当たり前だが、ここはゴミ一つなく、床は水もシミもない。実に綺

麗に使っている。それも 100 年近くの間だ。

この中央市場も世界遺産の登録範囲に入っているとはいえ、ユネスコの要請だけではこんなに綺麗にならないだろう。やはり過去の人間の創造物に対して感謝の念があるのだろう。



この市場の中にあるフードコートのような店でカルボナーラとハンバーガーを注文して食してみるが、味は今一というところだ。一緒に座って食べている平野夫妻が注文したサンドイッチの方が旨そうだ。隣の芝生は緑に見えるものなのだろう。

■街を歩く

平野夫妻と相談の結果、腹ごなしを兼ねて運河を歩く。

運河と言ってもやや広い小川が流れているだけで旧市街地と新市街地を隔てている。その運河のほとりが広範囲な公園のように整備されているので運河にそって散歩ができる。そしてそれが実に気持ちが良い。ちょうど紅葉で黄色や赤に色づいた葉と、それが落ち葉になって道を埋めているからだ。日がかなり斜めから差し込む木漏れ日もたまらなく良く、とても絵になる。それはまた贅沢な時間かも知れない。

午後から夕方の時間帯なので散歩やジョギングする地元の人たちも多い。ここでは今を生きる人たちと触れ合う。



アールデコの建物が多くあることで有名なアルベルタ通りに行くため地図を見ていると自転車に乗った現地人、それも大男が大声で何か言ってくる。

何か悪いことでもしたか？何を怒っているのだろうか？

ここは自転車優先とでも言っているのだろうか。

しかし、よく聞くとどうやらアルベルタ通りに行くにはそこの角を曲がって真っ直ぐ行けばいいと言っているらしい。人は見かけによらない、地元の人はみな親切だ。

そしてアルベルタ通りに辿り着いた確認に若い女性2人組にも聞いてみると、ここがそうだとやっている。やはり道を聞くなら若い女の子がいい。

アールデコ建築とは 1910 年頃から流行った外観に装飾を付した建築物で、見事にデコレーションを付した建物が並んでいる。



旧市街地は中世ヨーロッパ、そして新市街地は 20 世紀それも第一次世界大戦前の面影を色濃く残している。過去だけでなく現在も洗練されて成長しているという、まったくもって住民や観光客を飽きさせない街である。

■初体験の検札

旧市街地からホテルまではバスやタクシーで戻るのだが、私たちはせっかくなので架線から電気の供給を受けて動く究極のエコカーのトロリーバスに乗ることにした。日本ではこのタイプのバスは立山黒部アルペンルートの観光路線でしか走っていないので、乗る価値がある。

バスに乗り込むと運転手は太ったおばさんだ。通常は乗る前にインフォメーションセンターなどでプリペイド式の電子切符を購入するのだが、車内で運転手からも買うことができると聞いていた。

ヨーロッパの多くの国々では、バスや地下鉄の乗り降りに切符を見せたり回収したりしない。性善説に基づいたシステムで、みな切符を買って乗っているものという考え方をしており、日本のように人を疑って切符がないと乗れないとか降りられないという仕組みにはなっていない。私も最初はその仕組みを理解できなかったが、地球一周旅行の時にかなり経験した。ラトビアはどんなシステムかは事前に調べなかったので良く分からなかったが、切符なしで乗ろうと思えば乗って降りられるのは確かのようなのである。ただ、稀に検札員が乗って来てチェックするというので、無賃乗車発覚の場合は日本のように 3 倍で済むというのではなく何万円も取られると聞いていた。

私たちは運転手のおばさんから各自 2 ユーロ払って切符を購入し、席に着いた。するとその次に停まったバス停で偶然にも切符をチェックする検札員が乗って来て、切符を見せろと言ってくる。私たち一同はびっくりしつつも、得意げに切符を出して何か文句でもあるかという顔をしながら検札の彼に切符を渡す。

車内で検札員に会うという初めての経験は少しスリリングだ。平野さんの奥さんは良い体験ができたと妙にはしゃいでいるから面白い。旅行社の観光バスでは味わえない人間との触れ合いになる。

第三章 エストニア

■国境の街

何処までも平坦な土地を真っ直ぐな道路の上を快適にバスで移動し、いよいよエストニアに入国する。バルト 3 国は EU 圏内なので国境越えといっても検問はない。

それなのに何故この国境について書いているかという国境の街バルカは街の中に国境がある。バルト 3 国は近年までドイツやロシアなどの強国に侵略され統治を受けた歴史なので、この 3 国の間では国境の画定がなかった。ところが 1991 年にソビエト連邦からの独立時に国境を画定させる必要が生じた。そこでリーガの大聖堂のステンドグラスに歴史が書かれていると書いたが、その 1211 年当時の資料ではどうもこの街の中に国境があったらしいというので、この街を 2 つに分けて国境が出来た。

そのためにバルカの街はエストニア側ではバルガと呼ばれる。日本でも県境をまたいで学校や民家がある話は聞くが、国境とは恐れ入ってしまう。

■大学の街

タルトという人口 10 万人の街に立ち寄る。ここはエストニア第二の都市で大学の街という。学生が 6000 人もここで学んでいるから大学関係者だけでかなりの人口になる。そのために若者が多く、さらに家族連れや子どもも多い。大学があるので芸術の街という側面もあり、街中の至るところに面白いオブジェを見ることができる。

街の広場の入口には絵画の額のような黄色いオブジェ、広場には市庁舎がありその前には一年中雨に降られているような「キスの噴水」がある。



「お父さんと子供」というオブジェを見かけた。こんなものが街の真ん中の公園の脇のストリートに突如として現れる。芸術というか遊び心とでもいうのか実に面白い。

そしてここでも紅葉が美しい。



大学の建物では面白いものを見つける。壁に窓の絵を描いた建物で窓から手を振る人々がそこに居るようだ。しかし本物の窓は一つしかない。



この街だけではなくバルト 3 国全てに共通するが、人々は生活を楽しんでいることが実感できる。心にはとてもゆとりがあるなど感じる。

経済力や効率というものをひたすら追ってきた私たち日本人にとっては、何とも言い難い気持ちになる。

■いろいろな人たち

旅行もそろそろ後半になり、参加した 29 人のツアー客たちの人となりがいづぶん分かってくる。

熟年夫婦 2 人で来ているカップルが半分くらい。その他の珍しい人たちを紹介すると、学生時代の同級生という熟女 3 人組は私たち夫婦よりも 10 才くらい年上。おばさん 2 人の友人ペアもいる。若い女の子の一人旅が一人。若くないおじさんの一人旅が 3 人で、みな一人参加だが旅行に来てから意気投合したので 3 人で行動している。そして家族 3 人プラス従弟という組み合わせもあり面白い。海外旅行は奇数で参加すると色々不利なので 4 人での参加は確かに納得だ。そして母娘もいるが、嫁と姑という義理の母娘という面白い組み合わせもいる。

誰と話をしてもヨーロッパは手慣れたもので、もう行くところが無くなったのでバルト 3 国もあったなというノリでやって来た人たちが多く。そしてその人たちのほとんどは、今回の旅が一番良いと言っている。

■エストニア

エストニアの首都タリンに入る。

エストニアはバルト3国の中では面積も人口も一番少ない。エストニア135万人に対してリトアニアは約2倍の280万人だ。しかし面積はさほど大差はない。日本に例えればどの国も北海道を少し小さくした程度である。

エストニアは最も北にあるので寒さも厳しく、資源も乏しい。そのためにこの国ではITで国を創るという方針が明確にある。例えばスカイプというインターネットのテレビ電話システムの発明者はタリンの出身である。

国をどの方向にもっていこうと具体的に示すことはリーダーの責務だろう。エストニアの大統領はまだ40才、きっと若い彼にはいろいろな思いがあるのだろう。昨今の日本の政治を見ていると何やらうらやましくなってくる。

この国もドイツとロシアに支配され脅かされた歴史を持つが、さらに北欧のスウェーデンなどにも支配された。現在もその影響は強く、街で見かける車のナンバープレートはフィンランドが多い。それもそのはず対岸のフィンランドには2時間で渡航できる。

ホテルに泊まって気が付いたのはアフリカ系の従業員を見かけるようになったということで、今までの2ヵ国では見慣れない光景だ。彼に聞いたらナイジェリア出身という。労働者の構成が明らかに違う。

言葉も同じバルト3国でもエストニアは少し違うらしい。リトアニア語とラトビア語ではおおよそ通じるというが、エストニア語は言語体系が異なり通じないという。フィンランド語などに近いというので、ここは北欧に区分した方が良くかもしれない。こんなことは実際に入国して宿泊しないとピンとこない。

日本においてエストニア人で最も有名な人はというと大相撲の元大関の把瑠都だろう。彼の活躍がこの小さなエストニアを日本に紹介してくれた。

■おとぎの国

タリンを「おとぎの国」と呼ぶ人もいる。そのくらい街は中世ヨーロッパを残している。「おとぎの国」とは夢と憧れと思い出の街とでもいうのか、何か温かい感じがする。

そしてここにも3姉妹（スリーシスターズ）という15世紀の古い建物が3軒並んで建っている。室町時代に作られたこの建物は現在も現役のホテルとして使われている。



この街の特徴は城壁が多く残っていることで、城壁に付随した見張り塔も多い。その城壁の中を旧市街と呼び、教会、行政機構、商店、民家、そして石畳の道がある。それらはどれも古いが現在も使われている現役の施設で、単なる観光資源になっていない。その意味では街は今も生きている。



高台にある城壁に登っただけで街の眺望を楽しむことができる。そして改めて感じることは、この街はやはり「おとぎの国」なのだ。それに加えて街も、人々も、鳥も、今に生きているということだろう。



ここにも 60m の高さまで登れる聖オレフ教会の塔がある。リーガで登った塔よりもやや低いが、ここは歩いて階段を登らなくてはならない。それもすれ違うにもやっとという結構狭い螺旋階段を登るので大変である。登ってくる人々はこんなに大変と思わなかったと口々に言っている。

しかし大変な思いをして登ればその分の恩恵が待っており、ここから見るタリンの街も見ごたえ充分で素晴らしい。何しろ「おとぎの国」を上から見るのだから。



それはラトビアのリーガで塔に登って見た光景と似ているが、少し異なるのはフィンランド湾が大きく見えることだろう。天候次第ではおよそ 80km 先にある海の向こうのフィンランドも見えるかもしれない。港には大型客船や多くのフェリーボートが入港しており、この都市も中世からハンザ同盟の中核として賑わったことを彷彿させてくれる。





■ホテルの部屋から

私たちが泊まっているホテルは新市街地でありながら旧市街地の近くで便利な場所にある。そして商業施設と住宅地の間に位置しているので泊まっている部屋からは民家の様子までもうかがうことができる。

家族団らんで食事の支度をしている主婦やその近くで遊んでいる子供の姿まで見ることができる。別に私には覗きの趣味はないが、偶然に目に留まってしまった。

民家の屋根にある煙突からは白い煙が上がっている。何とほのぼのとしていることだろうか。

部屋で一杯やりながら窓越しにそんな光景を見ていると、この時間にここに住んでいる現代の人間との触れ合いを感じることができる。

■はじめての雨

日本を出発して7日目、この旅では初めて雨が降っている。観光旅行に雨は決して嬉しくないが、バルト3国での予定の観光も好天の中で全て終わっており、あとはポーランドのワルシャワに少しの時間立ち寄って日本行の飛行機に乗るだけなので雨のタリン空港もちょっと風情があるなどと余裕のコメントもツアー客からは聞こえてくる。

そのワルシャワに行く飛行機が遅れているので、私も添乗員に「なかなか飛行機が来ないね、いつも予定通りでは面白くないからね」などと余裕の会話をしている。

間もなくワルシャワ行の飛行機が到着してバルト3国を後にする。良い思い出ばかりのバルト3国だったなどと皆が口にしながらエストニアを後にする。

第四章 ポーランド

■2時間の滞在

このツアーの当初の予定はポーランドのワルシャワには3時間の滞在である。元々は乗り換え時間が5時間ということだったので、旅行社の企画担当者が5時間も空港で待っていてはもったいないということで時間を割いて3時間のワルシャワ見学をやや強引に入れたという。今回は飛行機が少し遅れたのでワルシャワ滞在は2時間ほどになっている。

ワルシャワといえば、西側の軍事同盟 NATO に対抗して組織されたワルシャワ条約機構という旧東側の軍事同盟の本拠地であることくらいしか私は知らなかった。何しろドタバタで出発したのだからしょうがない。

それでも2時間の市内観光で現地ガイドの説明からショパンとキューリー夫人の2人がワルシャワ市民の誇りになっているという。そういえば私たちが降りた空港の正式名称は「ショパン・ワルシャワ空港」である。

ついでに現地のポーランド人ガイドの話の節々にはポーランド人の気持ちのようなものが伝わってくる。遠まわしに言っているが、ドイツもロシアも決して好いてはいない。バルト3国だけでなくこのポーランドもこの2つの強国には痛い目にあっている。第二次世界大戦では独ソ不可侵条約の密約でポーランドの分割統治がその両強国の間で勝手に決められたことや、その前には120年もの間世界地図から消えた時もあったという。この国はバルト3国よりも不幸な過去を背負っているのかもしれない。



ドイツとロシアという列強に挟まれた国の悲哀なのだろう。幸いなことに我々日本人はそういう経験がない。第二次世界大戦であれだけ大敗しても分割統治も無く日本はほぼ昔のままの姿で存在している。本当にこの強運に感謝しなくてはならない。いや、運ではなく当時の日本人の努力の賜物だったに違いない。過去の人間、過去の日本人が残した最たるものが日本そのものなのだろう。

国が無くなるという経験がないのは幸せかもしれないが、愛国心や団結心、民族意識などが希薄になってきたような気もする。国家とは自分たちで作るものだという意識が弱いのだろうか。

私は国粋主義者でも何でもなく、単なる旅好きのおじさんだが旅をしているとそんなことを何となく感じる。

少し脱線するが、小松左京の「日本沈没」という小説がある。衝撃的なテーマなので映画化もされ小説ともどもヒットした。これは地震や火山活動で日本が沈んでいくプロセスを描いた SF 作品という位置づけだが、作者が本当に書きたかったのは国を失った日本人が世界各地に移住してどうやって生きていくのかだという。国がなくなるということをよりリアリティを持って実感させるために日本列島を沈めるという手段を選んだという。

うん、やはり脱線したか。

■フライトキャンセル

2 時間のワルシャワ観光の後に空港に戻ってワルシャワ発ポーランド航空の日本直行便にチェックインをして手荷物検査場を通過したところでもんでもないことが起きた。

突如としてインフォメーション画面の我々が乗ろうとした便の状態表示がフライトキャンセルという文字に書き換わっている。一同啞然としつつ、添乗員は事の重大さを認識してか少し引きつっているかと感じられる。

理由が全く分からないまま、とにかくポーランド航空のカウンターに並んでくださいと添乗員の言われるままに並ぶと行列はどんどん増えていく。

並ぶこと 30 分、さすがに代表の添乗員だけ並べばよかろうと我々はお役御免になるが、その後 5 時間程待つ。



その間には水やサンドイッチが航空会社から配られたり、我々のツアー客の何人かは持っているお菓子などを皆に配ったりしている。一人参加の若い女の子は土産に買ったチョコレートを配っている。その姿がとても心に残る。大変な時にはみんなで助け合いましょうという気持ちが伝わってくるから、本当に頭が下がる思いだ。

そしてようやく次の行程に進むことになる。まず予約していた飛行機はもはや飛ばないので本日は航空会社が用意したホテル泊が決定になる。次に添乗員の踏ん張り、つまり粘り強い交渉によって帰国便も決定する。29 人のうち 6 人は明日のフライトで帰国できるが、残りは明後日の便になるという。そして私たち夫婦は明後日の便に乗ることが決まった。つまり今日と明日はワルシャワ泊まりになる。

そしてフライトキャンセルの原因も判明する。何と飛行機の乗務員のストライキだというからとんでもない。確かここワルシャワは東側陣営の崩壊につながる労働運動の自主管理労組「連帯」の街だった。そんな街なので今でも資本家と戦っているのか。そんなことを肌で感じるようになるうとは思ってもよらなかった。

とにかくそういう理由なので、航空会社が滞在費用は全部もってくれることは確実だ。自然災害やテロでないのでやや安心する。

このフライトキャンセルで迷惑をこうむっているのは我々だけではない。私たち夫婦が座っているベンチの横にいる高校生くらいの男女約 30 人も同類の被害者らしい。

みなスポーツマンでフランス人らしい。その中で高校生よりやや年上の男性に聞いてみると、ここに居るメンバーはフランスから柔道の試合のために東京に行くという。恐らく彼らはスケジュールの関係で早く日本に着く必要があるらしく、明日にはいくつかのフライトに分乗して何が何でも日本を目指すという。もしも分かれて乗った場合、成田や関空に着いて東京まで高校生が数人でたどり着けるのか。他人事とはいえ心配してしまう。

とにかくここで、我々は自分たちの乗る飛行機が無くなったという現実を突きつけられた。乗っていた飛行機が墜落した訳でもなく、2 度と飛行機が飛ばない訳でもないので大袈裟に考えることもないが、これから先どうするかは考える必要がある。

帰国便の手配は申し訳ないが添乗員に任せよう。そして日本の家族への連絡がまず優先。そして次はここでどうやって過ごすか。私には差し迫った仕事がある訳でもない。

私の脳裏に地球一周クルーズで知り合った友人の顔が浮かんだ。LINE でいつも連絡を取っており確かベルリンに住んでいる。ワルシャワからはそんなに遠くない飛行機なら 1 時間、列車でも 5 時間で行ける。

いやいや、さすがにそれは添乗員に心配をかけるだけだろう。確実に帰国するのが最重要だろう。やはりワルシャワ観光か。いろいろなことがシミュレーションできる。これは結構面白いなどと勝手に考えていると添乗員から集合がかかる。

チェックインした際に預けた荷物を再度出してもらい、タクシー乗り場まで押していく。そこには我々を送り出す役目を負った若い空港担当者が、本当に申し訳ないということをポーランド語で言っている。ポーランド語は全く理解できないが、十分にその気持ちは伝わってくる。

タクシーに分乗し、夜 9 時に航空会社の用意したホテルに着いた。ようやく夕食にありつくことができた。もちろん費用は全てポーランド航空持ちだ。

■判断基準

29 人のうち一泊して 6 人が帰国する。23 人が更に一泊して都合 2 泊する訳であるが、早く帰りたいとか、どうせ宿泊も食事も航空会社負担なのだからのんびりしたいとか、人によって要望は様々である。

2 泊しての帰国の場合は、完全フリーの日が一日追加になる。つまりワルシャワ観光が丸一日できるという訳だ。

ここで 6 人の選出基準が問題になる。仕事があるからというのを聞いていたら切りがないし、人それぞれに事情があるので希望を聞いていたら収集がつかない。

6 人を選んだのは航空会社のカウンターに並んでいる時に添乗員が航空会社の振り替えの担当者と交渉する中で決めていった。つまり最初から 6 人ありきなのではなく、今ならどこ経由の便で何人振り替えられる。それをいちいち検討して調整しては複数カウンターで振り替えをしているので見る見るうちに座席が埋まっていく。例えば 10 席空いていると分かってもそれをす

ぐに確保しないと 10 が 8 になったり、5 になったりするということだ。

添乗員としては、出来ることならば 29 人一緒に帰国させたいが、そんなことを待っているといつになるか分からない。2 つか 3 つのグループに分かれるのは致し方ないところだろう。リーダーとは物事は決めなくてはいけない時があり、何らかの判断基準を示して即決する必要に迫られる。

添乗員がとった判断基準とは、成田から国内便を乗り継いで遠方に帰宅するお客を優先的に選んだという。首都圏在住者は成田に着けばすぐに帰宅できるが、地方への乗り継ぎは更に半日くらいかかる。とにかく早く確実に帰宅させることを優先したという。これは添乗員の機転なのか、マニュアル通りなのかは分からないが、実に明快でかつ正しい。

■ワルシャワ観光パート 2

本日は雨の観光になる。プラスアルファの一日を使って 2 時間しか観光していなかったワルシャワを丸一日観光できることになるので多少の雨は我慢だ。私たち夫婦にとっては、あるいは多くのツアー客にとってもラッキーな一日なのだから。

元々は 3 時間のバス観光のワルシャワは付け足しのような行程なのでガイドブックなど準備している人はほとんどいない。さらに現地通貨ズロチも誰も持っていない。ここポーランドは EU 圏でありながら通貨はユーロではない。

そんな中、添乗員がどこからか市内の地図をもらってきて皆に配ってくれている。そしてホテルの近くに地下鉄の駅があるので、2 駅乗ると市内の中心に出られるという。地下鉄の切符はクレジットカードで買えるので現地通貨は不要という。そんなことまで調べてくれているとは何という気配りだろうか。

市の中心にでるまで添乗員も同行してくれるという。ただし 6 人を送り出さないといけないので半分はそちらの作業になるから、申し訳ないが完全同行はできないという。ほとんどのツアー客は旅慣れているからあまり心配いらないが、それでもとてもありがたい。

駅の券売機で切符を買って地下鉄に乗る。駅も地下鉄もとても綺麗だ。ニューヨークの地下鉄のように落書きも無ければゴミも落ちていない。ヨーロッパは全体的に地下鉄などが綺麗だが、あえて言えば同じヨーロッパでも南部より北部の方が綺麗で秩序も保たれている。



コペルニクスの像がある。彼もこの国の英雄で、天文学者だけかと思いきやキリスト教の司祭でもある。そんな彼が地動説を唱えるとはその勇気に驚きである。当時のキリスト教の教義は天動説だったからだ。きっと科学と宗教の狭間で悩んだに違いない。

彼の像の目をじっと見ているとその悩みが伝わってくるような気がする。

コペルニクス像の直ぐ近くに聖十字架教会がある。この教会の入口から2つ目の柱の中には何とショパンの心臓が納められている。小さな壺に入れられ、たぶんコニャック漬けの状態という。

ショパンは39才の時パリで亡くなったが祖国をこよなく愛しながらも、ロシアなどの支配下にあつて祖国への帰国は叶わず心臓だけは祖国に埋葬してほしいという彼の生前の願いを受けて最期を看取った姉が決死の覚悟で心臓をドレスの下に隠して国境を越えたという。こういう話は国民の心を打つ。空港に名前が残るはずだ。

地元の観光ボランティアらしきおじさんが、とても親切に、そして熱心にショパンの心臓の柱はここだよと教えてくれる。



ワルシャワ大学に立ち寄る。私たち夫婦は国内外を問わず地元の大学を訪れることが多い。若者が居て、何となくアカデミックで活気があるところが好きだからだ。

チャンスがあれば学生食堂で昼食をとりたいなど考えて立ち寄ったが、ポーランド語で書かれた校内案内図ではどこが食堂なのか分からないので、仕方なくキャンパス中央の図書館と売店に入る。図書館は実に格調高く、静かなところだ。売店ではワルシャワ大学の名前の入ったTシャツとジャンパーを買う。これは滅多に手に入らないとても良い土産になる。

気温は9℃、雨にも降られて寒いのでレストランに入り温まることにする。ポーランドの名物料理の「ジュレック・スープ」、そしてポーランド風の餃子「ピエロギ」、この2つは外せないらしい。昨日の現地ガイドが強く勧めていたのを思い出し注文する。さらにホットワインにビールも注文する。バルト3国に比べて食生活が豊になっているのを感じる。

「ジュレック・スープ」はちょっと酸味があり、それはライ麦とハーブをまぜて発酵させたものという。確かに日本人の口には合いそうだ。ホットワインは面白い器で登場する。保温のためにローソクの火で下から温める仕掛けになっている。こんな雨に日には持ってこいだ。



再び雨の中を世界遺産の旧市街地の街歩きをする。寒さと雨宿りのために近くの教会に入る。30分も椅子に座っていると体が温まり、そして心が休まり、教会の空気に同化しているかの感覚がしてくる。

宗教とは、教会とは、本来こういうものなのかも知れない。休息を求めてふらっと立ち寄った旅人に安らぎを与えてくれる。日本で同じようなことがある。真夏のお寺の境内で蝉の声を聞きながら涼をとるのは実に心地良い。

■ SPIRYTUS

ホテルに帰ってロビーで待っている間、SPIRYTUS（スピリタス）という酒をツアー客のおじさんから勧められる。本日の街歩きでこのポーランド原産の酒を買ってきたので一緒に一杯やらないかというお誘いである。この酒はウォッカで世界一の96度のアルコール度数を誇るから、まるでガソリンのようだ。それでもキュッと一杯飲むと喉から火がでるような感触で、味は二の次だろう。

彼はスキーや冬山をやるというのでこの酒を知っていて、ポーランドにしか売っていないボトルを探していたという。このボトルとは異なるが日本でも輸入しているという。

確かに冬山には良さそうだ。彼もエンジニアで私と意見が合い、私が長年やっている極寒キャンプの話などで盛り上がる。

その酒を飲んで盛り上がった時の会話の一端で彼の持論を紹介しておこう。

若者はもっと元気を出して欲しい。ただ日本は年寄りが元気過ぎて文句をいうからいけない。修学旅行は国が負担して、寺回りや観光ではなく海外それも発展途上国に出すべきだとか。なかなか面白い。



■ 5つ星ホテル

最後の宿泊はホテルが替わってホテルルネサンスという空港直結のホテルに移動する。何しろ非常事態の中でこの人数の部屋を簡単に確保できないからしょうがない。しかし再びラッキーだと感じ始める。

このホテルは5つ星でとにかく豪華だ。現代アートの今までとは明らかに違う高価な雰囲気のホテルでとても安いパッケージ旅行では泊まれるホテルでないのでまさにポーランド航空さまさまといったところだ。

本日の夕食が本当に最後の晩餐になる。添乗員からはお詫びのしるしに夕食で一杯おごるように旅行会社から言われているとのことアルコールも付いている。旅行会社も我々同様にどちらかと言えば被害者の側に入るはずだが、その配慮は誠に嬉しい。

ツアー客で一番元気の良いおばさんが乾杯をしたいという。「添乗員さんご苦労様！」と大きな声で叫んで一同乾杯する。ここワルシャワには本来泊まる予定もないところに泊まり、明日は無事に帰国の途につくことができるのも添乗員の尽力のお陰で感謝は一同の思いだ。本当に御苦労さまだ。

フライトキャンセルからワルシャワ一日フリー観光、そして豪華ホテルという一連の流れがあまりに刺激的で感動を与えてくれる。これが演出だとしたら、よくぞこの企画をしたと褒めたたえたい。

■飛行機の中で出会う旅の達人

帰国便の隣に座った 70 才くらいのおじさんとの話が実に興味深い。個人旅行でポーランドとドイツを 25 日間かけて回ってきたという奈良さんという人だ。地方を旅したいので英語だけではダメで現地語が必要になるという。そのために今回はポーランド語を 2 年間かけて勉強して臨んだというから凄い。

ポーランド語は発音が難しいと現地ガイドから聞いていたが、奈良さんは格変化が非常に分かりにくいという。そして勉強する教科書がほとんどないから更に大変だという。

興味本位で何か国語しゃべれるのか聞いてみると正式に習った言葉は 10 ヶ国語だという。多分日常のちょっとした会話で少し勉強した程度ならば、その倍くらいはありそうだ。

彼は仕事で海外に行っていたので言葉との関りが多かったという。そしてもちろん世界各国の地方を回るといことは地理や歴史にも相当に詳しいのだろう。旅の達人は至るところにいる。

成田からポーランドへの往路のフライトでやはり隣に座った年配の紳士のことを思い出した。その彼も芸術を求めてヨーロッパを 40 回程旅している。推定年齢は 80 才という小松さんだ。

ヨーロッパは良質の芸術に比較的簡単に触れることができるのでついつい来てしまうという。今回も個人旅行で 3 週間ほど娘と妹夫婦と一緒にポーランドを中心に回るという。

この人はヨーロッパの芸術だけでなく漢詩や短歌にも才がある。

凄い話を聞いた。

学生時代に好きな女性に想いを伝えるために全国紙の新聞に短歌を投稿し、偶然にも彼女がその新聞を見て、彼の想いが伝わり結婚できたという逸話はあまりに素晴らしい。

住まいも出身も高知というから豪快な人で、鯉のタタキがとても旨いから日本に帰ったら送ってくれるという。たまたま飛行機で乗り合わせて数時間話ただけなのに凄い人もいるものである。私は早速名刺を渡して、お礼を先に言ってしまった。

本当に鯉のタタキが送られてきたら、何を返そうかななどと妻と相談するのも初めての経験だ。

第五章 旅の記録

■行程

2018 年 10 月 16 日～23 日までの 8 日間は当初予定で、実際には 10 月 16 日～25 日の 10 日間の行程になった。以下時系列に記述する。時間は全て現地時間

(※は旅行代金に入っていない食事を自分でとったもの)

- ・1日目 10:15 成田発 ポーランド航空 ワルシャワ経由ビリニュス着 18:20 (時差-6時間)
以降はチャータの観光バスで移動
ビリニュス ホテル KAROLINA 泊 夕食なし (機内食が遅い時間なので)
- ・2日目 ビリニュス市内観光 昼食はコルドゥナイ
トラカイ観光
ビリニュス ホテル KAROLINA 泊 夕食はホテルレストラン
- ・3日目 カウナス観光 杉原千畝の旧日本領事館 昼食はジャガイモ団子のツェペリナイ
シャウレイ十字架の丘
リーガ DAYS ホテル泊 夕食はホテルレストラン
- ・4日目 リーガ市内観光
昼から自由行動 (※昼食は中央市場、聖ペテロ教会他、市内散策、※夕食はスーパーで購入)
リーガ DAYS ホテル泊
- ・5日目 エストニアへバス移動 タルト市内見学 昼食はチキン料理
タリン PARK INN BY RADDISSON MERITON ホテル泊 夕食はホテルレストラン
- ・6日目 タリン市内観光
昼から自由行動 (※昼食はラエコヤ広場のレルトラン、※夕食はスーパーで購入)
タリン PARK INN BY RADDISSON MERITON ホテル泊
- ・7日目 8:55 タリン発 ポーランド航空 ワルシャワ着 10:30
ワルシャワ市内観光 ※昼食は自由時間に街のレストラン
14:00 頃にフライトキャンセル発覚 20:30 ホテル着
ワルシャワ ホテル HOLIDAY INN 泊 夕食はホテルレストラン
- ・8日目 自由行動 (地下鉄で中心部へ移動、昼食はレストランでピエロギなど)
ワルシャワ RENAISSANCE ホテル泊 夕食はホテルレストラン
- ・9日目 15:10 ワルシャワ発 ポーランド航空
- ・10日目 8:40 成田着

■費用

総費用は夫婦2人で約54万円、以下詳細を記す。(全て2人分)

- | | |
|-----------------------------------|-----------|
| ・ 阪急交通社払い込み (サーチャージ 32800 円×2 含む) | 459520 円 |
| ・ 現地での支払い (食事、飲み物) | 約 30000 円 |
| ・ 土産物 | 約 20000 円 |
| ・ 国内交通費 (横浜-成田往復バス回数券) | 11000 円 |
| ・ 海外旅行保険 | 14490 円 |